

説教「人間の綱」ホセア 11：1～11

日々の生活の中で、過去を振り返ることがあります。そこには、2つの大きな意味があるように思います。それは、有形無形を問わず、今の時代に欠けているような価値ある何かが過去にあったのならば、それをもう一度取り戻していくという意義です。また逆に、決して取り戻してはならない、二度とあってはならないという志を与えられることもあります。77年前の歴史を思い起こすことは、77年前の歩みを二度と繰り返してはならないという反省と誓いの意味でもあります。

ホセア書11章には、まさに過去を振り返るべき内容が記されています。時は紀元前722年前後のこと、イスラエルは北王国イスラエルと南王国ユダに分裂しており、北王国イスラエルは大国アッシリアによって滅ぼされようとしていました。預言者ホセアは、この危機的な状況の中で神の言葉を語るのです。「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。わたしが彼らを呼び出したのに 彼らはわたしから去って行き バアルに犠牲をささげ 偶像に香をたいた」（1～2節）。これは、神とイスラエルの関わりについて記しています。そこには、イスラエルをかえりみられる神の愛があり、そして神の愛から離れて行ったイスラエルの罪をみることができます。神がイスラエルをいつも呼び出されていたのに対して、イスラエルは神のもとから去って行きました。しかも、バアル（当時のカナン地方に根づいていた偶像）を拝み始めてしまったのです。イスラエルは、神ならぬものを神として礼拝し始めたというのです。

私たちの歩みはどうでしょうか。まさか、イスラエルのように偶像礼拝などはしないと誰もが思うでしょう。しかし、本当にそう言いきれるのでしょうか。実は私たちも、あのイスラエルと同じように、“偶像礼拝”をしてしまうような弱い存在なのです。人形のような偶像を拝むことは確かにないでしょう。しかし信頼すべき真の神に祈り求めることをせず、むしろ人間の知恵と力のみを頼りとし、お金さえあればなどと、人間の作り出した有形無形のあらゆるものによりすがってしまう誘惑や危機は誰にでもあろうかと思えます。それは、かつてのイスラエルの歩みと同じ、もはや“偶像礼拝”なのです。

真の神を捨てて偶像礼拝に走ったイスラエルに、決定的なさばきの言葉がくだります。「たとえ彼らが天に向かって叫んでも 助け起こされることは決してない」（7節）。たとえ助けを求めても、決して助けられることはないという、この決定的かつ残酷な言葉の意味はどこにあるのか、愛の神ではなかったのか、神の憐れみとゆるしは、どこにあるのでしょうか。

ところが、神の救いは、まさにここにあるのです。それは、神の救いが、さばきと表裏一体をなしているからです。イスラエルを徹底的にさばかれる神であるゆえに、神はイスラエルを徹底的に愛されるのです。その神のご意思が印象的に記されています。「ああ、エフライムよ お前を見捨てることができようか。イスラエルよ お前を引き渡すことができようか。アダムのようにお前を見捨て ツェボイムのようにすることができようか。わたしは激しく心を動かされ 憐れみに胸を焼かれる。わたしは、もはや怒りに燃えることなく エフライムを再び滅ぼすことはしない」（8～9節）。「エフライム」は北イスラエルの代表的な部族、「アダム」「ツェボイム」は、さばきを象徴する地名です。神において、かつてイスラエルゆえに燃えた怒りの炎は、今やイスラエルゆえに憐れみの火とし

て激しく燃えているのです。

「わたしは神であり、人間ではない」（9節）。注目すべき言葉です。人間であれば、さばきと憐れみ、ゆるしが同時に起こることなどあり得ません。しかし神の救いは、その両者が同時に起こっています。それは、主イエス・キリストゆえです。2千年前のキリストの十字架は、まさに神のさばきであると同時に、神の憐れみとゆるしの恵みにほかなりません。しかも、復活の命によって、この十字架の出来事が真の救いとなったのです。

人間ではない神が与えてくださる、キリストによる偉大な愛、この愛に基づく救いのしるしを、ある言葉の中に受けとめていきたいと思えます。それは、「人間の綱」（4節）です。神は人間を結ぶ綱、すなわち愛のきずなをもって、この世界を救われるというのです。「彼らの顎から軛を取り去り身をかがめて食べさせた」（4節）とあります。軛を外されなければ、家畜は餌を食べることはできません。また、親は幼子の高さにまで身をかがめるようにしなければ、食べさせることはできません。懸命に子どもの世話をする親の深い愛情が、ここにあります。子育てにおいて親が抱く深い愛は、親と子を結びつける硬い「綱」であり、確かなきずなです。

「綱」には、硬いイメージがあります。弱いひものようではなく、何本もの繊維がより合わさってできた、かたい一本の綱。ならば、神がこの世界で用いられる「人間の綱」とは、どのようなものなのでしょうか。

「情けは人のためならず」と言われます。情けはいずれこの世をめぐりめぐって自分に返ってくるのだから、人には情けをかけておいた方がよいという意味です。つまり、人への情けは、ゆくゆくは自分のためになるのだと言われています。ところが、信仰においては全く逆であることに気づくのです。「情けは人のためならず」ではなく「情けは人のためなり」です。つまり、人に与えた情けが自分に返ってくるのではなく、すでに最初から無条件で神に情けを与えられている、愛されているゆえに、私たちは人を愛していくのです。人を愛することは自分のためではなく、人のためであり、それはとりもなおさず、神のためです。しかも、私たちの愛の由来は、主イエス・キリストの恵みにあります。キリストによって神が与えてくださるはかり知れない愛、ここにこそ、私たちの愛の源泉があるのです。この愛に生きる喜びを、私たちはお互いに分かち合っていきます。キリストの恵みによって与えられた神の愛を、互いに与え合っていくのです。この愛が、幾重にもより合わさって「人間の綱」、愛の綱が形成されていくのです。

神はこの2千年間、キリストの恵みによって「人間の綱」を成長させてくださり、この「綱」をもって、この世界を深く愛されました。今、ここに礼拝をささげている私たちもまた、神が育てられた愛の「綱」により合わされて生きる一人ひとりです。この私たちの交わりが、神の愛をこの世界へと映し出す硬い「人間の綱」として、福音宣教のために豊かに用いられていくのです。